

〔巻頭言〕

コロナ禍での研究活動

社会福祉学科長
岡 知史

2020年度は、歴史に残る1年だったと思う。何もかもが異例であった。上智大学の春学期は4月になっても始まらず、最初の授業は5月26日に行われた。オンライン授業という、多くの教員が全く未経験だったものを、いきなり始めることとなった。私自身、自室で独り言をいうような授業が続いた印象が残っている。Zoomの授業でも、カメラを開かない学生が、果たしてそこにいるのかと疑問をもった。家庭の事情のため落ち着いて授業を受けられず、発言を教員から求められても周囲の状況から何も言えなかったという学生の苦しく辛い事情に私が気づいたのは、それからずっと後のこと、秋も深まるころだったと思う。

国境も閉じられ、留学生のなかには母国にしながら新生になった人もいた。指導料を大学に支払いながらも、一度も来日できず、当然、上智大学に来ることもできず、指導教員に直接会うことができないまま、その期間を終えた外国人特別研究生もいる。2020年度、社会福祉学科は海外招聘客員教員の受け入れを予定し、担当科目を開講し、学内に住居も準備していたが、それもキャンセルになった。多くの学生が留学を断念した。海外での学会に参加することも（オンラインでないかぎり）難しかった。

学生の研究活動も大きな制限を受けた。病院はもちろん、多くの福祉機関や団体が訪問者を歓迎しなかった。インタビューも難しかった。大学の図書館は後になって、それでも使えることがわかったが、最初のうちは許可が無いと大学の構内にも入れないということで利用を諦めている学生も多かった。図書館が、リモートでも使えるという情報が十分に学生に届かなかったのである。社会福祉実習も実習先からキャンセルされることが繰り返された。

職員が基本的に在宅勤務になったため、業務で使われるメールの量は、爆発的に増えた。対面であれば、あるいはせめて電話できれば、数分で確認できることを、メールで行うのは負担が大きかった。締め切りが過ぎていると叱責され、覚えが無いと反論すれば、メールで知らせたはずだと言われ、メールボックスを調べると、たしかに件のメールが、多くのメールのなかに埋もれていたりする。例年はスムーズにいく事務手続きが、なかなかうまく行かず、どこかで止まっていたりする。紙で動くなら、手続きが止まっていることが目に見えるのだが、メールだとそれがわからないから扱いが難しい。

郵便が止まってしまったのも大きな問題だった。大学に郵便物は届くが、それが研究室にまで届かない。従来は、多くの部署の多くの職員によって担われていた学内郵便が、職員の在宅勤務のために、うまく機能しなくなってしまった。それが研究活動の支障になった教員も多かったのではないかと思う。

学生どうしの議論が非常に難しかったこともコロナ禍の影響だろう。授業の前後に気の合う者同士で気軽に情報交換し励まし合うことも非常に大事なことののだが、オンラインだけで、そのような学生どうしの交流は不可能に近いと（少なくとも私には）思えた。大学院生や卒論執筆の学部生の個別の指導は、Zoomを使うことによって例年より多くの時間をとれたように思えたが、学生どうしが学び合う機会が少なかったため、学生が研究に打ち込む熱意には個人差が大きく、その熱意が他の学生にまで伝わるような現象は見られなかったように思う（これも私だけが持っている印象かもしれないが）。

マイナスなことばかり書いてしまったが、オンラインでの教育、研究が進むことによって得られることも多いことは、もうさまざまところで書かれているから、ここで繰り返す必要もないだろうと思う。また上記のマイナス点も、私を含めた大学側の対応でなんとか対処できる場所もあったはずである。コロナ禍で覆われた特異な1年を記録するために、そして今後の対策につながるように、あえて愚痴のようなことを書かせていただいた。

今年度は、このような異常な事態になったが、そのなかで本学科は、二人の教授を迎えることになった。本号に寄稿されている香取照幸教授と丸山桂教授である。困難な状況にもかかわらず、本学科の教育と研究のために尽力して下さったことに感謝いたします。

2021年3月